生成 AI との対話が「書くこと」を変える
―二つの実践から見えた推敲指導の可能性―

茨城県笠間市立北川根小学校教諭
白土 瑞樹



一九八五年、茨城県生まれ。教職歴十七年目。中学校国語科、義務教育学校を経て、現在は小学校に勤務。国語教育・ICTを活用した教育を中心に、児童生徒が主体的に学び合う授業づくりを実践。著書に『中学校国語　単元内自由進度学習ガイドブック　生徒が自ら学び進める授業モデル』（明治図書）。

はじめに

生成ＡＩの教育利活用が国の方針として推進されている。しかし、具体的に現場でどのように活用すればよいのかわからないという声が大きいのではないだろうか。世間では生成ＡＩの有用性に関する理解が深まり、その活用が広がっている中、教育現場での活用となると途端にわからないことが増えてしまう。

一方、近年、小中学校の教室の風景は確実に変わりつつある。ＧＩＧＡスクール構想による一人一台端末の整備から五年余りが経った。多くの学校では、導入初期の試しに使ってみるという段階を脱し、効果的な活用方法が模索されている。さらに、二〇二六年度以降、自治体での端末更新も進んでいる。小中学校の授業では日常的にタブレットが活用され、クラウド上で互いの考えを共有し、参照し合いながら学ぶことに子どもたちは慣れてきている。ＩＣＴ活用は次のフェーズに入っているといえるだろう。

本稿では、小学校六年生の国語科で生成ＡＩを推敲の相談相手として活用した二つの実践を紹介し、生成ＡＩを用いた「書くこと」の指導において教師が意識すべき要点について述べたい。

本実践は小学生に対する実践である。現在の高校生とは状況が異なるかもしれないが、数年後には本実践のようにＡＩに慣れ親しんだ子どもたちが高校に進学することになる。そのとき高校ではどのような学びを推進していく必要があるのか、そのような視点でこの実践をお読みいただければ幸いである。

「書くこと」の指導における課題

国語科における「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の領域の中で、私が一番の課題として感じているのは「書くこと」である。この領域では特に児童一人一人の学習進度に大きな差が生まれるように感じる。書くことが得意でどんどん書き進んでいく児童がいる一方、何を書けばいいかわからない児童、書き出せても途中で止まってしまう児童も多くいる。そのような児童は友達と相談したり教師の声かけを待ったりすることになるが、教師が一時間でクラスの児童三十人に一人一人丁寧にアドバイスをすることは現実的に相当難しい。そこで、私は生成ＡＩを活用すれば、「書くこと」における子どもたちの負担を少しでも軽減できるのではないかと考え、二つの実践を行った。

生成ＡＩの設計と活用のルール

本実践における生成ＡＩの設計について述べる。児童が使用する生成ＡＩとして選んだのは「スクールＡＩ」というサービスである。導入当初の二〇二五年度は、小学生が安全に使える生成ＡＩが限られていた。広く知られている「Chat GPT」や「Gemini」には年齢制限があ

り、差別表現や暴力的表現など不適切な言葉への対応にも配慮が必要である。「スクールＡＩ」は全年齢対象で、セキュリティやフィルタリングなどの安全性に配慮されており、さらにプロンプトの設定により、教師側でＡＩの振る舞いをカスタマイズできる利点があった。

本実践では、二種類の用途で生成ＡＩを活用した。自分の文章について何度でも相談できる伴走者としての「推敲相談用ＡＩ」と、自分なりに書き上がった段階で提出する相手としての「評価者ＡＩ」である。当初は推敲相談用ＡＩのみで実践を行う予定であった。しかし、似たような実践を行っていた友人（高校の英語科の先生）から「推敲を支援するＡＩだけでなく、評価する立場のＡＩも用意した方が児童の学習意欲が高まるのではないか」という助言をいただき、評価者ＡＩを加えることにした。二つのＡＩの役割を明確に分けたため、児童が活用の場面で混乱することはなかった。

また、児童には生成ＡＩの活用にあたって次の三点を伝えた。第一に、生成ＡＩにはハルシネーション（事実と異なる情報を生成すること）があること。第二に、生成ＡＩの出力をそのまま使うのではなく、必ず自分自身で内容を吟味してから採用するかどうかを決めること。第三に、最終的に文章を決めるのは自分自身であること。つまり、「生成ＡＩは相談相手であって、答えを出してくれる存在ではない」という位置づけを、実践の初めに明示した。

実践一　提案する文章の作成

一つ目の実践は、二〇二五年十一月末から十二月初旬にかけて行った「構成を考えて、提案する文章を書こう」（全八時間）である。児童は「学校をよりよくするためにはどうすればよいか」という視点で校長先生に向けて提案文を書く。六年間過ごした学校だけに、多くの児童がそれぞれに改善したい課題を抱えていた。まず児童は、生成ＡＩに頼らず自分の力で提案の内容を考えるところから始めた。ここでつまずいた児童も数名いたが、少数であったため教師が個別に声をかけることができた。その後、児童はそれぞれのペースで、推敲相談用ＡＩと相談しながら文章を改善していく。この実践では、評価者ＡＩを校長先生という設定にし、書き上がったと判断したら校長先生ＡＩに提出するという流れをとった。提案文としての説得力をもたせるため、一二〇〇字以上という分量の条件を設けた。

しかし、この条件が裏目に出た面もあった。指定した分量が多かったために、生成ＡＩの提案をそのまま受け入れ、出力された文章をそのまま貼り付けた児童がいたのである。これが判明したのは、後述の実践二で児童が振り返りを記載したときであった。つまり実践一を行った時点では、児童の文章がＡＩの文章そのままだったとは誰も気づかなかったわけである。その理由として、生成ＡＩが出力した文章の質が高く、児童が書いた文章との区別がつきにくかったことが考えられる。結果としてその児童は、生成ＡＩが出力した「それっぽい文章」の大部分を自分の言葉として吟味しないまま使ってしまっていた。これは便利な道具を手にした子どもの自然な反応でもあるが、「書くこと」の学びとしては本質的な問題をはらんでいる。おそらく多くの先生方は、この問題があるからこそ生成ＡＩの活用に踏み出しにくいと感じているのではないだろうか。

今振り返ると、ＡＩの利用に関するルールを設けるだけでは不十分であり、実際にＡＩを繰り返し使う経験の中で、児童自身が判断力を身につけていく過程が必要だったのだと感じている。

実践二　経験と考えを伝える文章の作成

二つ目の実践は、二〇二六年二月末から三月初旬にかけて行った。小学校生活が終わろうという時期に実施したのは「大切にしたい言葉」（全六時間）の単元である。この単元は自分が中学生になっても大切にしたい言葉を自身の経験と絡めて文章に書くという内容である。本実践でも二種類の生成ＡＩを活用した。推敲相談用ＡＩの役割は実践一と同様である。評価者ＡＩは、私をイメージした中学校国語科の先生と

いう設定にした。私自身がもともと中学校の国語科教師であり、児童もそのことを知っていたため、進学先の中学校で出会うかもしれない「国語の先生」を幾分意識できるような仕掛けである。

この単元で感じたのは、一回目の経験を経た児童たちの生成ＡＩとの向き合い方が明らかに変化していたということだ。先の生成ＡＩの出力をそのままコピーした児童は振り返りにおいて「生成ＡＩに書いてもらった文章をそのまま使わず、自分で付け加えて書いた。」と述べている。なぜそのような心境の変化に至ったか聞き取ったところ、「改めて生成ＡＩが書いた文章を読み返したら、自分の経験とは違っていた。それ以外に修正してほしいところを伝えても、うまく修正してくれなかった。生成ＡＩもうまくできないことがあるのだと思った。」という主旨のことを述べていた。生成ＡＩが自分の思った通りの出力をしないことに気づいた上で、生成ＡＩの出力を参考にしながらも、自分の言葉で書き直すという判断ができるようになっていた。

この児童と推敲相談用ＡＩとの実際のやりとりを見ると、変化がより鮮明に見えてくる。実践一では、この児童はＡＩの提案をほぼそのまま受け入れ、やりとりの主導権はＡＩ側にあった。ところが実践二では様子が異なる。ＡＩが「授業で津田梅子のことを学んだとき」という例文を提案すると、この児童は「授業ではなくてネットで見つけたんです」と自分の体験に基づいて訂正した。また、ＡＩが文の言い換えを提案した場面では「ここはこのままがいいです」と、自分の表現を守る判断をしていたこともわかった。

さらに興味深いのは、この児童が推敲を重ねた末に「例文を一二〇〇字出力してほしい」とＡＩに完成形の出力を求めた場面である。実践二でも、生成ＡＩに文章の大部分を書いてもらおうとする行動自体は消えていなかった。しかし、出力された文章を読んだこの児童は、結果的にそれをそのまま採用しなかった。それは、自分の体験との食い違いや表現方法の差など、生成ＡＩの文章が自分の伝えたいこととずれていることに気づいたからである。生成ＡＩに頼ろうとする行動は同じでも、出力を鵜呑みにするか、自分で判断できるかという変化が生じた。この差は小さいようでいて、「書くこと」の学びにおいては決定的に大きいと考える。

この変化の要因として、やはり生成ＡＩを「使い慣れた」ことが大きいと思っている。生成ＡＩは二〇二五年六月から導入したが、当初はあまり活用できていなかった。それは生成ＡＩの特性に対するもっともな懸念（例えばハルシネーションや性能の限界）が主な原因であった。しかし、他教科も含め授業の中で自由に活用できる環境を整えたところ、児童が主体的に生成ＡＩを活用し始めた。自分一人では課題解決が難しいとき、先生に相談しづらいときなど、教師からの働きかけをせずとも、積極的に生成ＡＩを活用し始める児童が多くなってきた。導入当初、児童にとって生成ＡＩは新しい遊び道具とあまり変わらなかったのかもしれない。しかし使い慣れていくうちに、その道具の癖や限界が見えてくる児童が増えてきた。繰り返し使う中で「ここは頼れる」「ここは自分で考えた方がいい」という線引きが、児童の中に自然と生まれていったように感じる。

さらに印象的だったのは、「文を書き直したらすぐ推敲相談用ＡＩに頼るのではなく、まずは自分で読み直すことにした。ＡＩの考える読みやすさと人の感じる読みやすさは違うと思ったから。」と述べた児童がいたことである。確かに私たち大人は、生成ＡＩが出力した文章にどこか違和感を覚えることがある。だが、その違和感が生成ＡＩに由来するものかどうかを正確に判断することは決して容易ではない。大人が文章の違和感に気づけるのは、多くの文章に触れた経験値によるものだと思っていた。しかし、本実践においては、生成ＡＩの記述と人の記述の差異に小学校六年生が自らの力で気づいたのだ。さらに、どのタイミングで生成ＡＩを活用するかの判断を主体的に下していた。これには驚きを感じずにはいられない。教師が教えたわけではなく、児童自身が、ＡＩとの対話を繰り返す中でこの認識にたどり着いたのである。

この単元は、自分の経験や思いを綴る自己表現の要素が強い。だからこそ、生成ＡＩの提案と自分の実感がずれる場面が生まれやすかったのだと感じる。他の児童も「生成ＡＩは同じことしか言わない」「自分の経験は生成ＡＩにはわからない」と述べていることが多く、生成ＡＩと人間の違いや生成ＡＩができることとできないことの見極めが少しずつできるようになってきていた。結果として、生成ＡＩが自分の望んだ出力をしなかったことで、「では自分はどう書きたいのか」を改めて考えざるを得なくなる環境が生じた。児童にとっては、このズレが、自分の言葉を見つめ直す契機になっていた。

おわりに

生成ＡＩを活用した推敲指導において重要なのは、生成ＡＩの性能ではなく、どのように対話するかという「問いの質」だと考える。二つの実践を通して、「もっとよくして」というように漠然とした指示しか出せない段階から、「ここの理由が弱いから別の根拠を考えたい」「自分の言いたいことはこうだが、伝わる表現になっているか」というように具体的に相談できる段階への成長が見られた。この変化は、まさに国語科が育てるべき「言葉の力」そのものではないだろうか。そしてこの力は、一度きりの体験では育たない。繰り返し生成ＡＩと向き合い、時にはその提案を退ける経験を積み重ねることで、少しずつ身についていくものであると感じる。

さらに、この力は校種を問わず必要な力なのではないだろうか。高校の国語科においても、例えば小論文の構成を練る場面、記述式問題で自分の考えを論述する場面、あるいは日常的な文章表現の場面で、生成ＡＩは推敲の相談相手として機能し得る。そのとき考えるべきは、生成ＡＩを使うか使わないかではなく、生成ＡＩに何をどう聞くかではないだろうか。

今回の二つの実践を通じて、私自身が最も考えさせられたのは、教師の役割の変化である。従来、「書くこと」の指導において教師は添削者であり、助言者であった。ただ、その際に気をつけなければならないのは、児童の文章をよりよくしたいと願うあまり、結果として教師自身の文章へと作り変えてしまう可能性があるということである。これは、児童が生成ＡＩの出力をそのまま受け入れてしまうことと、実は同じ構造の問題である。書き手の手から、その子自身の言葉が離れていってしまうのである。だからこそ、生成ＡＩが推敲の相談相手になる授業では、教師の役割は添削者から学びの設計者へと変わる必要がある。どのような生成ＡＩを用意し、どのような場面で使わせ、どのようなルールを設定するか。そして、生成ＡＩでは対応できない部分、つまり児童生徒の思いに寄り添い、「あなたが本当に伝えたいことは何か」と問いかけることを、教師が担う。生成ＡＩが教室に入ることで、むしろ教師にしかできないことが鮮明になったと感じている。

「生成ＡＩを使って書いた文章は、本人の文章といえるのか」という問いをいただくことがある。私の考えは明確で、それは本人の文章である。なぜなら、生成ＡＩが出力した文章を採用するか退けるかを最終的に判断したのは、他でもない本人だからである。実践一で生成ＡＩの出力をそのままコピーした児童は、実践二ではその出力が自分の体験とは違うと気づき、採用しなかった。この「自ら考え判断する力」は義務教育、そしてその先の学校教育において育んでいくべき力だと私は考えている。そして、生成ＡＩはその力を育てるための有効なツールになり得るとも考えている。

「ＡＩの考える読みやすさと人の感じる読みやすさは違う」と見抜いた小学生が、やがては高校生になる。彼らはすでに生成ＡＩとの対話を経験し、その限界も感じ取っている。この流れはすでに不可逆であろう。今後、高校の国語科においては、生成ＡＩを排除するのでも無条件に受け入れるのでもなく、生徒が自分の言葉を見つめ直すための道具として位置づけ直す視点が求められてくるのではないだろうか。未来を担う子どもたちを、校種を越えて、共に育んでいくことが私たち教師に求められる役割なのではないだろうか。